

個人性格と社會性格

東京女子高師教授 倉 橋 惣 三

○個人性格の意義

此個人的性格と云ふ言葉は餘り適切な言葉の使ひ方ではないかと思ひますけれども、云はゞ人間を一人として考へた時の其價値の附け方であり、Aと云ふ人間が、Aと云ふ人間としてどんな價値を持つて居るか云ふ立場から之を見た時に個人的性格と云ふ問題が、起つて來る、最も代表的なものは密室に立籠りまして、宇宙の偉大さを感謝して居ると云ふやうな宗教的な其生活の状態、或は深く自分の生活を思ひ潜めまして到達して居る、哲學的な生活ををして居る其立場から見た自分と云ふやうなものは言換れば他のB、Cなどは無交渉な只Aそれ自身として考へて居る生活であります、宗教的或は哲學的な場合はそれで宜いとして、實際の生活に於てAがAとして一人居ると云ふことは人間社會生活に於てはない筈である、必ずBが、隣りに居るか、C、

が前に居るか他の個人と云ふものと關係を持つて居るに相違ないのであります、併しながら其他の個人と交渉して居る場合と雖も、若しも其Bと云ふものを矢張個人的存在として其處に考へましてAと云ふ個人とBと云ふ個人との其互の個人的性格に依る交渉と云ふだけの問題を考へた場合に於ては矢張Aは個人的性格を一步も出て居ない、Bも亦個人的性格の所有者として取扱はれて居るだけであります。

○關係道德と性格道德

抽象的な言ひ方ではありますが、例へば信實であること云ふやうなことは、是は或る見方に於ては人間生活の最も基礎的な中心的なものでありませう、英語で云ふシンシアである、信實である、信實とは誰に對して信實であるのか、現れた所で云へば、約束を守ると云ふことは誰さんの爲に信實を守ると云ふこともありませう、其友人に對して信實を守ると云

ふことでもありませう、債權者に向つて信實を守ると云ふことでもありませう。併しながら信實と云ふことの最も中心的な意味はAが、自分に對して信實であること云ふことを以て基礎とする、信實と云ふことをもう少し平に云ひました正直と云ふやうなことは其働いて居る關係に於ては人に向つて正直な、人を欺かざることでありませうけれども其性格として正直な性格である、言換れば自己に信實な性格の所有者である、謙遜と云ふやうなことは、其現れて來ます外形に於ては誰に謙遜であるかと云ふやうなことになりません、主人と對して謙遜である、先生に對して謙遜である、併しながら、謙遜と云ふことを極く其中心的意義まで突詰めて考へますならば、相手に依つた謙遜ぢやなくて、自己のキャラクターの中に性格の中に謙遜的性格がある、形で養はれた道德生活に於ては相手に依つて自分のキャラクターを變へることを平氣でいたしますけれども、性格を根柢とする所の道德生活に於ては自分の方が、信實な性格を持つ、自分の方が謙遜な性格を持つて居るが、故に人に對してそれが現れて來る、斯う見なければならぬのであります。我が國の謙遜と云ふことは、多

くは遠慮と云ふやうな、信實が、正直と云ふやうなことになると同じく謙遜が、遠慮と云ふことに能く似かよつて居りまして、人に向つて遠慮する、所謂對象的なものに對する場合と云ふだけに考へられ易いのであります。若しも謙遜と云ふことをキャラクターでなく、性格でなく、人間と人間との關係の事實であるとして仕舞ひますならば、是は謙遜と云ふものが極めて淺薄な或は貧弱なものになつて來る、あの心に信實な謙遜的キャラクターを持つことなくして、只關係道德に於て約束を破らない人、關係道德に於て崇めなければならぬ人の前に遠慮して、それだけのものと云ふものは幾らも見るところであります。

人間はもう少し深い所に生活の根柢があり、教育も亦も少し深い所まで這入り得るのぢやないかと私共は思ひます、子供を教育する上に於きまして、いきなり性格の信實、性格の謙遜を使つて、それを至る所に主人にも信實なれ僕にも信實なれ、強い友達にも信實なれ、弱い友達にも信實なれ、上の人にも謙遜なれ、何處の乞食にも謙遜な心が持てるやうになれと云ふことは子供に向つて可なり難かしいことであり

ませう、故に子供を教育する方法が取つて居る道として、は對象的に關係生活的に誰に誰にと云ふ當途のある關係生活で信實謙遜を経験させ又説聞させますけれども併し其窮極する所はさう云ふ性格に之がななくちやならぬと云ふ意味に於て個人性格と云ふものを考へて行きたいと思ふのであります、若し我の生活が只關係法則に依つてのみ考へられ支配されて解決し得たと定めて仕舞へば、個人性格と云ふものはあつても無きが如きものである、併し個人性格の發揮であると考へて來る時に個人性格と云ふものが問題になつて來、價值を持つて來るのであります。AがBに對する關係としまして親切と云ふやうなことが起る。信實は最も個人的性格のものであり、謙遜は稍々對象的のものであるが、親切に至つて、益々對象の趣きを備へて來るを免れませぬ、私は信實である、宇宙陸合に對して何だか謙虛な心持がして來ると云ふことに比較しまして、誰の當途なしに自分は親切であると云ふやうなことは是は少し考へ難いことであります、考へ難いことではありますけれども、其親切と云ふものゝ根本基礎になります所の其性格と云ふものに何と云ふ言葉を用ひて宜いか

分りませぬが、或る性格があつて、其性格が色々の對象に向つて發揮すると考へれば、之も矢張關係道德ぢやなくて性格道德になつて來ます。と申しますのは多く關係道德、關係生活と云ふのみで考へられ、或はそれで律せられて居ることも、其實は個人性格と云ふ所に基礎を置かなければならないものなのでさうした時だけに本當の價值と云ふものがあるのだと云ふことを見やうとするのであります。

此個人性格と云ふものは教育の目的の中に於て大事なものであると云ふことを今までの教育に於て決して忘れて居つたものではありませぬ、恐らく今までの教育が狙つて居る所は主として其個人的性格であつたでありませう、只私の餘計な心配を持つ所は今申しましたやうな意義に於て個人性格と云ふことが、中心にまで、考へられて居るか矢張關係生活と云ふ所で止つちまつて居るかと云ふことに付て多少の疑を持ちますけれども、併し此方面の教育を主にして居ると云ふことは認めるのであります。

○從來説かれたる二性格の

關係と現社會

所が此處にも一つ我々の考へて來なくちやならぬことは哲學的に考へて來ますれば、個人と云ふものは判然した獨立のものでありませうけれども、我々の生活して居ります此現實に於ては獨り生活して居ると云ふことは抽象なことであり、事實は必ず大小に拘らず或る社會生活をして居る、其社會生活をして居る時に今申しました如き個人的性格と其社會生活を營み得る性格とどんな關係になつて居るであらうかと云ふことを考へる必要が起つて來る。

此問題に對して多く考へられて居りました解決は斯う云ふ論法になつて居ると思ひます、人間は個人的性格と云ふものが第一次的に信實なものである、それが人と關係して來る時には獨りで生活して居るとして考へた其個人的性格、そのものだけではいかない所がある、只正直で只謙遜であると云ふことだけで、其己を正しうし、己を全うし、己を守ると云ふことに於ては、それで宜いでありませうが、社會生活をするに云ふことになるに云ふとそれだけでは出來なくなる、そこで色々の社會生活に必要なものが第二次的に出來て來る、斯う考へなくちやならぬ、人間は本來個人的に生活するのが、主體である、

それが社會生活をするが故に二次的に色々の生活そこに始めて來る、二次的生活の中には消極的には一人でならば宜いけれども人と一緒に居るが爲に仕方がない、我慢すると云つたやうな其消極的方面もありませう、或は又人と一緒に居る時には人を愛すると云つたやうな積極的な出方に出て居るものもありませう、消極の場合に於ては明らかに我慢したのであつて、二次的のものでありますが、それは論外として、積極的に人を愛すると云つた心持、それは社會生活をするが故に生じた所の、二次的の性格であると云ふ風に考へる、それをまあ私は餘り内容に這入らないで問題の輪廓を取扱つて行かうと思ひますけれども、内容に這入つて具體的に見ますならば、例へば諸君の御承知の生存競争と云ふことを主體として、人間の生活を説明して居る所謂進化論の影響を受けました總ての倫學學、それを極度に倫理の形に於て實現したのは、例のホップスでありませう。

斯う云ふ風なものに於ては人間と云ふものを社會生活をするに云ふ時に、どこまでも、各自、己を主とする、己を守る所の己を全うする所のものである

と云ふことを本體として、さうしてそれが第二次的に色々の社會生活の形式が生れて來るのである、斯う考へるのでありますけれども、若しも人間の生活と云ふものゝ中に個人的性格だけが、眞實に本當にあるものであつて、後は二次的に外から出來て來るものだと假にいたしますならば、其個人的性格を充分に教育すれば、自ら社會的性格も二次的に生れて來ると云ふ事が云へるのであります、或る場合に於ては個人的性格を充分に教育すれば其方ばかり強くなつて、社會的性格などは生れて來ないと云ふやうな論もある、又さう云ふ言葉で説明されやすいやうな事實も我々の近所に見るのでありますけれども、併しながら假に個人的性格と云ふものから第二次的に色々のものが生れて來ると云ふことを充分に認めたとしますならば、其個人的性格と云ふものを充分教育することに依つて、恐らく社會的性格が生れて來る、斯う云ふ議論になる、從來性格の教育が個人的性格を主とすることに於て決して居なかつたと云ふことを私申し上げましたが、それは同時に個人的性格を作ることによつて、當然社會的性格が出來て來る、實際的に云へば個人的完全な生活をなせ

るものは、社會的生活が完全に出來ると斯う考へて居つたと云ふことになるのであります、世の中はA B C D Eの集合である、Aにして眞に信實なる個人的性格を持つて居るならば、亦B C D Eも皆信實謙遜或は親切と云ふやうな個人的生活を持つて居るならば、自ら其社會と云ふものは立派な社會と云ふものになる、斯う考へて居つた。

其考は繰返して申しますならば、其個人的性格から第二次的に色々のものが生れて來る、社會的性格が生れて來ると斯う考へたからである、所が今日我が色々の人から教へられ又考へさせられ又氣が付く所に依りますと云ふと、社會的性格と云ふものは個人的性格とどんな關係にあるかと云ふことは暫く別として、それがそれ自身として人間の中に養はるべき獨立のものであると云ふことを感ずるのであります、例へば親切と云ふやうな所で申しますならば、己に信實、己に謙遜、従つて誰かに謙遜親切と云ふことは、寧ろ人に向つての關係的な意義を持つて居ると居ふ意味に於て餘程社會的な性格の一種になつて來るけれども、此親切がAと云ふ個人がBと云ふ個人に向つての個人的性格の現れと云ふ意味に

於て限られた親切でありましたならば、是がさながら其儘に社會的親切と云ふことは云へないのであります、此世の中は此通り親切なものでない、併しながら相會つて居る人々は可なり親切に個人性格として親切を持つて居る人である、さうして親切な人は彼方に二人、此方に二人と居るが、併しながら此社會と云ふ生活になりますと、此社會は決して信實に親切な生活が漲つて居ると云ふことが云へなくなつて来る、其時に或る人は斯う考へる、それは矢張本當の親切を一人々々が、持つて居ないからである、一人々々の親切と云ふものが、立派になれば、其立派な親切な人から築き上げられて居る、此社會と云ふものは親切を以て充ち満ちて居る社會になるに相違ないと斯う云ふのであります、或はさうかも知れませぬ、さうかも知れませぬが、併し可なりそれでは随分努力した今日、それが實現して居ないと云ふことは確かであります、今日教育は個人性格を本當に作ると云ふことに於ても大いにまだ微弱な所があるかも知れませぬが、それに付ては非常に努力して居る、而も社會としてはどうも本當の生活と云ふものが、生れて來ない、

親切からもう一つ進みまして、協同と云ふやうな問題に這入つたとします、此間に色々のものがある譯でありませうが、コーポレーションと云ふ問題に入つて、協同と云ふやうなことの出来る人は勿論個人性格として不完全な人が寄つては本當の解決は出來ますまい、けれども併しながら實際の事實を見ますと云ふと、個人的に己を守り己れを正しうし、己を全うし、或は何かの個人的關係に於ては相當に立派な生活が出来る人が寄集つて、協同が出來ない又しい場合が非常に多いのである、尙ほ又反對に個人性格としては甚だ駄目な人間、併し協同が出來て居ると云ふやうな場合も見える、蟻が作つて居ります社會の協同と云ふものは、人間が何も今更手本にするものでも何でもありませんまいが、あの驚くべきコーポラティブな協同的生活と云ふものは決して蟻が立派な個人的性格の所有者であるが故にあつたて居るのぢやないのであります、そこで私は個人的性格から總ての社會的性格が第二次的に生れて來ると云ふ事は、人間の生活を餘りに組合せめにモザイクに積木細工的に考へた抽象な議論であつて、社會生活其事實を事實として凝つて見詰めるものとつて、

それは甚だ嫌らないと云ふ事と思ふのであります。

○群居から相互生活へ

此協同とか親切とか云ふことより、ずつと元とに歸りまして、人間の社會生活の根柢と云ふものは其心理的の極く基礎に於ては群居と云ふやうなことが一番の原になると思ひます、群居と云ふやうなことは形から見れば、寄集つて居ると云ふことだけであります、群居を好む心、或は群居したいと云ふ心、それを一人々々が持つて居る心の性格であります、個人性格として非常に完全な所謂聖賢の士と云ふやうな人が、必ず兩方のキャラクターを持つて居ませうが、修養の結果個人性格の非常に良く出来た人が、集りまして、一人々々に群居を好む心のない時には寄集りと云ふものは機械的に寄集りませう、相談的に寄集りませう、色々規約を作ることは出来ませう、契約を作ることは出来ませう、併しながら何處までも離れたA B C D Eで、一つ／＼に離れたものゝ集合に過ぎない、でA B C D Eから成立つて居る所の一つの社會、其最も基礎的に於ては其一つの群居と云ふものを作らない場合がある、之に反してAそれ

自身Bそれ自身Cそれ自身としては決して本當に信實な人間でもない、本當に謙遜な人間でもない、本當に親切な人間でもない、個人的性格としては出来上つて居ない人間同志でありまして、假に言葉を使へば所謂八公熊公でありまして、それが集合して居る時に於ては互の中に實に群居を好む、人と共に居ることを好む、群居を樂しむ所の其キャラクターの人であります、その作つて居る社會と云ふものは非常に立派なものが、出来て居ることがある、學校の場合で申しますならば、個人的性格の立場から見ても、操行一等の子供達が、本當に仲間を作るかと思つて、必ずしもさうでない、個人的性格の立場から行きましては、随分弱蟲であり又随分己にも守ることの力の弱いものであるけれども實際集る所に其仲間と云ふものゝ結合は實に靄々として行はれて居ると云ふやうなこともありませう、是は一例に過ぎませぬが、群居を好むと云ふやうな心持と云ふものは、決して各自の個人的性格の發達したる極致から生れて來るものでなく、其各自の個人的性格と云ふことゝ別にさう云ふものが、人間にあるのだと見て行きたい。

此協同と云ふやうな中の或る何處かの位地に位して居ります所の相互的生活、所謂ミューチュアリズムと云ふものがある、相互的生活と云ふことの形から云へば、やり取り、テーキング、ギビングで、向ふがやつた、此方が返す、あの通りすれ／＼になつて居る隣り同志が物を貰つて、御返しをすれば、外形的にはそこに相互的生活が營まれて居るけれども相互生活と云ふものは、其形でなく、心に這入れば相互生活を樂しむ心である、相互生活を喜ぶの心、相互生活なしには居られない心、是は群居と云ふことから、段々々々そこまで發達して來たものでありませう、群居の程度の高いものでありませう、群居は只一人居ることの淋しさ、一人居ることの物足りなさ云ふ心が一杯でありまして、さうして人と一緒に居たい、是は諸君のやうに失禮でありますけれども、個人的性格の方を非常に認めて居る方に於ては人と一緒に居たいと云ふ心は弱蟲の弱者の心と御思ひになるか知れませぬが、是が人間の性格としては、個人性格としてはそんなことではいけないか知れませぬが、社會的性格と云ふ立場から見れば、之こそ眞純なる人間性である、人と一緒に居たい、け

れども己只一人己を全うする世の中にはなか／＼人と一緒に仕事のしていけない場合もありませう、自分を捨てなければならぬ場合にもありませうし、離れなければならぬ場合もありませう、何事の苦勞なく妥協して人と共に居る人もありませう、離れて居る方が、個人的性格を正しう全うする、所謂高潔なる場合と云ふ場合も幾らもありませう、けれども其時に其人が個人的に一人離れて居ること云ふことに付て、何等の人間の淋しみと云ふものを其人が感じなかつたとしたならばそれは個人的性格としては信實、天を仰いで謙遜であつても併しながら、社會的性格としては缺陷のある人と云はなくちやならぬ、勿論只わい／＼として人と共に居たい、己を正しうする考もなく、己を守る考もなく、只人と一緒に居ることを好むわい／＼生活と云ふものは個人的性格と云ふ立場から見れば値打のないものでありませう、併しながら片方があつても、片方がなければ矢張それは完全な我々の望ましき人間生活とは云へない。

唯人と一緒に居ると云ふ弱い心から、弱いが、偉いのであります、其弱い而して偉い人間の心から群

居を好むものが、もう少し己に歸らないで、己に別れないで人に別れる、妙な言ひ方でありますが、人と一緒に居りまして己と云ふものに付て別れて來ると離れて仕舞ふのであります、併しあの人と唯一緒に居るのぢやない、あの方は自分とは別な人だと云ふ感じを向ふに付て人間が個人を離して仕舞へば、其人々に向つて仕事をしやうと云ふ感じが出る、向ふにも其感じが出る、其所にミューチュアリズム、相互生活と云ふことがあるので、相互生活と云ふことは決して相互に之から助け合ひまして、有無相通じて巧くやませうと云つたやうな契約相談的だけなものではないと思ふ、我々の教育に於ては獨立心を養つて人の世話にならぬでも行ける生活、之を非常に尊重して居る、人の世話にならぬで行ける生活と云ふものは何處までも立派なことであります、併し人の世話になることを喜ばず、素直に受取れないと云ふ生活が、出來たならば、是は人間として缺けたものだと思ふ、人の爲に親切を致せ、人の爲に盡せよと頻りに教へる、併しながら親切をすることだけが愉快であると云ふ性格は個人として人の世話にならないでも宜いと云ふ獨立のものであつて、人の世

話だけはしなければならぬ、自分は人の世話にならないのが良いことであつて、人の世話をすることが良いのであると云ふ此考へ方と云ふものは二人の人間を同時に尊敬する意味から云ひますならば、解けない言葉であります、若し人の世話にならない、と云ふことだけが、本當に偉い道徳であるならば、親切と云ふ道徳は何處にも存在がない、人の世話にならなくつても行けると云ふ孤立獨立の力、個人的性格それは偉いものでありませう、併しながら、世話になりたいと云ふ心持、助けて貰ひたいと云ふ心持、或は助けて貰つた時に口惜しくもなくそれを素直に受取れる心持と云つたやうな心持は、人間として決して弱い心持ちぢやないと思ふ、其助けて貰つた時の喜、それを持つて居る二人が打突つて居る時に初めて相互生活が出來るのであります。

○本體としての社會性格

唯人に施すことを以て自己の満足を味ふやうな心の人が集つて助合つた時に是は互に人を馬鹿にして居る生活であります、其相互生活と云ふやうな議論から出て來たことぢやなく、或るものから發出した

二次的のものぢやなく、相互生活それ自身、それさながらに我々が心に養はなければならぬものである。斯う云ふ風に考へたいと思ふ、皆立派になつてから助け合ふのぢやありません、皆樂屋で立派に形作つて出て来て打突かるのぢやないのであります、生活其ものが初めから助けられるの喜、助けられた嬉れしさ助けられた有難さ、そんなものが養はれて行くのであります、勿論そこに一方には個人的性格と云ふものがありますから、個人的性格の立場から行つて、唯助けられると云ふことを喜んで獨立する方の意思も力もないと云ふことは、是はいけないうことであらうが、同時に片方だけあると云ふことは人間として、決して完全なものぢやない、斯う云ふことを色々の點で數えて行きますならば、色の御話が出来ると思ひますが要するに私は此個人的性格と云ふものと、どう云ふ關係になつて居るかは考へて居ないのであります、別に離して考へられる所の社會的性格と云ふものが、人間にあるし、又それはそれとして養ふことが出来るし、又それの必要だと云ふ各方面を持たうとする、今までの個人的性格を本體とし、さうしてそれを犠牲に供する所

に愛が生れるとか、それを抑へる所に氣高い奉仕の心が生れるとか、さう云ふ説き方は私は甚だ充分でないと思ふのであります、今日人間が集つて居ると云ふことから生ずる、集つて居る此集らずに居られない人間社會、集りたいから集つたのぢやなく、集ると云ふそれなしに我々が一日の生活が出来ない、集ると云ふことが本體であつて哲學的に話せば抽象的に話せば色々に變りますけれども事實としては斯うやつて居る、一緒に生活して居る、生活をして居りながら、而も其集合生活社會生活を營む方の心と云ふものを、偉く道德的に取扱つて居ると云ふことは、偉く綺麗なこと、偉く氣高い感心すべきことに取扱つて居ると云ふことは、即ち個人的性格と云ふものを第一義としてそれを抑へるとか、我慢するとか色々のことからのみ、社會生活が出来て來るものだと思ふからであります、若し私の云つた所を極端に云ふとすれば、人間は努力なしに群居が、努力なしに相互が、努力なしに協同が出来ると其社會的性格を本質的に持つて宜いと思ふ、又それをそれとして教養することが出来ると斯う思ふのであります、今日の社會的教育論、社會生活の訓練を本體と

する教育論と云ふものは此處まで行かなければ本當に徹底しないと私は思ひます、又そこまで行つて居ない人でもそんなことを臆ろ氣に考へて居るのぢやないかと思はれるのであります、本當に人間の價値生活と云ふことの極致を個人に置いて、社會的生活をして居るからそれに間に合ふやうな便利なやうに訓練することを社會的教育と云ふことの總てとするならば、社會的教育論は便宜主義的教育であります、個人として全きかと云ふこと、社會的に其人が素直に生活出来る人であるかないかと云ふことは對等な價値を以て取扱ふべきものだと思ふのであります。

○現世紀に於ける教育の

一問題として

私は倫理學の深い知識を持ちませぬからして、どうして我々が云ふ所謂人間としての第一次的な價値を持つことを個人性格の方にのみ限つて、さうして社會性格の方のことを我慢で出来る、便宜で出来る、妥協で出来る道德生活と云ふ風にするやうな考へ方が起つて來たものか、其由來を能く知

らないのであります、併しながら我々が往々にして持つ如き、あの人は社會生活に於ては、不適當な社會的性格を持つて居るけれども、言換れば社會的性格に於ては多くの缺點を持つて居るけれども個人的性格としてはあの人は完全であると云ふやうな云ひ方は、我々の捨てなければならぬ問題ぢやないかと思ひます、是が此世紀に於て我々が到達して居ります最も深く考へ直さなければならぬ教育の問題の可なり重要な一つぢやないかと思ひます、お前は友達と仲が悪かつた、お前は協同生活が出来なかつた、お前は相互生活が營めなかつた、けれどもお前の心は清いものであり、高潔なものであり、己を正しうしたものであると云ふことを以て天國に行けると云ふことは我々が今日少しく躊躇する結論であります、基督教自身、或は佛教自身が宗教であり、或は哲學的考察でありまして、個人的性格の方に非常に重きを置いて人間を見た、従つて其結論が我々に影響して居る所に於て個人的性格を主にする人間價値と云ふ方に重きを偏つて居ると云ふことは、是は無理からぬことと思ひます、此世紀にあつて、此現代にあつて、我々が、新しく眼が覺めて來

ました、新しく築いて來ました宗教的哲學的考には個人的性格の他に斯うやつて居ることの事實、斯うやつて一緒に居ることの事實、此第一次的事實、二次的ぢやない、一次的事實と云ふものを見出したのが今日の新しい問題ぢやないかと思ひます、或は此考察を續けて行つて、矢張それが間違であることの後になつて氣が付くか知れませぬ、人間は當然個人が本體で、集合は是は便宜な偶然であると云ふ事に矢張なるかも知れませぬ、而して今日我々が氣が付いて居つて、是が今日我々の稍々さうであると思つて信じて居る點は、個人の完全と云ふこと、同時に集合生活、社會生活と云ふことに於ての完全と云ふものを人間性格の非常に大きなものとして見て行かうとする、此考を基礎に置いた時に初めて、社會生活の教育、社會的生活が出来る人としての訓練と云ふものは、社會的性格其ものに於て訓練しなければ出来ないものだと思ふことが自然に分つて來るのであります。

今までのやり方で一人々々を教育してそつちから完全な人を一人出さない、此方からも一人出さずと云ふ風にして社會を作つて行つても、而も其一人々々は社會生活そのものに於て訓練された人ぢやなく一人として訓練された人は、密室に這入つて考へる時に、或は己を清くし正しくして、誘惑に負け

ないやうにし、人に下らず妥協しないやうにして、人に阿らないやうにして、人に下らなく降参しないやうにと云ふやうなことに於ては非常に訓練は出來て居るのでありませうが、阿るに非ず、降参するに非ず。妥協するに非ず人と親しむ協同すると云ふやうな心に於ては、大いに缺けて居る人があつたならば、其人達の作る社會と云ふものは何處までもコンベンショナルな便宜主義を失はないので、信實な社會は作れない、私は此點に付ては自分でも少し空想かと思ふ程の空想を考へた、詰り私共が自分の心を分解して見て、感ずる所の此人と一緒に居たいと云ふ感じ、助けると同時に人に助けて貰ひたいと云ふ感じ、與へるだけでなく向ふからもして貰ひたいと云ふ心、人の親切を其儘ずつと樂に受取ると云ふやうな心、所謂個人的性格から見では弱いと云はれるやうな親しみの心、斯う云ふ風なことを第一次的に矢張人間の中に見出したい、又尊重し、それを養つて育つて行くと云ふことが、大いに考へなければならぬ問題ぢやないかと思ひます、涼しいやうであります、もう一言申添へますと、個人的性格と云ふものを本體として、それが社會的性格に發達しないことを責めるのぢやなくて、社會的生活其のもの、養はれて居ないことを悲しむと云ふ考へ方を持つて行かなければならぬことが随分ありはしないかと思ふのであります。

(講演筆記)